■木村兼葭堂　　本草家。富と実証主義精神を背景に諸学を修め，膨大な諸物を蒐集，図書館・博物館兼サロンとなった。
きむらけんかどう
悪鋳再開・・1736＝　　大坂北堀江瓶橋北詰で，富裕な酒造家坪井屋吉右衛門重周の子に生まれる。本名は木村孔恭。

生来虚弱であったが，設備などを貸与しての酒造と貸家経営という富も時間もある生活を背景に，

・・・・・・1740＝ 4歳：この頃，物産の話を聞いて興味を抱くとともに，
・・・・・・1741＝ 5歳：この頃，狩野派大岡春卜に絵を学び，
ついで，柳沢淇園の粉本を学び，後，その知遇を得る。

徳川吉宗隠居1745＝ 9歳：
菅原伝授＋・1746＝10歳：京都の儒者片山北海に経史・詩文を，
義経千本桜・1747＝11歳：沈南蘋の画風を伝える僧鶴亭に花鳥画を学び，
忠臣蔵・・・1748＝12歳：柳沢淇園に連れられて池大雅に師事するなど，
_早くから一流の人物の影響を受けて詩文・書画・物産の学をよくするようになり，
・・・・・・1750＝14歳：父が死去。
徳川吉宗没・1751＝15歳：母に連れられ京都に出て，本草学者津島桂庵に入門，

_この間，元禄時代以降伸長してきた実証主義精神も身につけ，
山脇東洋解剖1754＝18歳：

・・・・・・1756＝20歳：結婚。*家を新築した際，掘った井戸から芦の根が現れ，古来有名な"浪華の芦"と感激，兼葭堂と称する。
_珍書・奇書・書画骨董等のコレクションも膨大になって行き，好事家らが全国から立ち寄り始め，
宝暦事件・・1758＝22歳：この頃，_読書・作詩文の研究会{兼葭堂会}を発足させ，

大岡忠光没・1760＝24歳：この頃，_私邸の書斎{兼葭堂}を開き，
・・・・・・1761＝25歳：_最初の事業となる僧大典の詩集「昨非集」を上梓，
_以後，自らの研究を深める一方，パトロン的本領を発揮して諸人の著作の刊行に努め，
・・・・・・1763＝27歳：
加賀千代句集1764＝28歳：_片山北海が創立した{混沌詩社}に参加するや，中心メンバーになり，
蘭銭初輸入・1765＝29歳：妻に子ができず妾を迎える。_{兼葭堂会}を解消して{混沌詩社}に合流。

_妻妾同居で，客人を暖かくもてなしながら，

・・・・・・1769＝33歳：長女が誕生。町内年寄役となる。
・・・・・・1770＝34歳：_{兼葭堂}開館10年を記念して中井竹山が「兼葭堂記」を著す。我が国金石学の記念碑的著作「銅器来由私記」をまとめて学界に衝撃を与え，
田沼意次老中1772＝36歳：*この頃には，図書館兼博物館的{兼葭堂}の体裁が整い，多くの文人・学者が出入りするようになった。
その後も上田秋成らを支援し，編集・校訂・刊行などを続けるが，
解体新書・・1774＝38歳：長女を天然痘で失い，
黄表紙始・・1775＝39歳：建部綾足の「建氏画苑」が出版されるに際し，序文を寄せ，この年刊行された「浪華郷友録」では，画家部門に記載されている。
雨月物語刊・1776＝40歳：池大雅が死去。{混沌詩社}の最長老・鳥山崧岳が死去して自然消滅となる。
ﾛｼｱ船蝦夷来 1778＝42歳：母が死去して本家からの援助が途絶え，経済的にも自立の生活を余儀なくされ，
源内獄中死・1779＝43歳：日記を点け始める。_本草学の最高峰・小野蘭山の塾で本格的系統的に学んで飛躍のきっかけを掴む。
その後も相変わらず，与謝蕪村や浦上玉堂ら一流文化人との交流を続け，
・・・・・・1781＝45歳：
この頃，大坂に住んだ清商人の子で書家の趙陶斎から，書を学んでいる。
蘭学階梯・・1783＝47歳：社会運動家・高山彦九郎の訪問を受ける。
意知刺殺事件1784＝48歳：江戸に出府した際，平戸侯・松浦静山と会う。
蝦夷初調査・1785＝49歳：_小野蘭山に正式に入門。大槻玄沢が来訪し，その協力を得て，
田沼意次失脚1786＝50歳：*本草学者・博物学者としての代表的著作となる「一角纂考」を訳述，
寛政改革始・1787＝51歳：老中首座に座った松平定信が，改革の一環として，酒造制限令を発したことから，

初の横綱・・1789＝53歳：北組惣年寄りから家業の酒で過造ありと訴えられ，
異学の禁・・1790＝54歳：*支配人が処罰されて道具一式を没収された上，町年寄役も剥奪されて引退を余儀なくされ，ともに趙陶斎に書を習った伊勢長島藩主増山雪斎の計らいで，その領内の川尻村に転居。

松平定信引退1793＝57歳：_大坂に戻り，

_老病が間断なく続き，跡継ぎも無く，家事紛糾といった状況の中，なお，往時の文化人との交流を楽しみ，刊行等を行なったが，

蝦夷地直轄始1799＝63歳：桑山玉洲の画論書「絵事鄙言」を刊行，

宣長没・・・1801＝65歳：大田南畝や田能村竹田が来訪。
一九膝栗毛始1802＝66歳：_没した。
没後まもなく，大坂町奉所の命で，膨大な蔵書や標本類について目録が作成され，その多くが，500両を下賜金と引き換えに，幕府に献上すなわち収公され，昌平坂学問所に移されて，長く活用されることになる(現在は国立公文書館に納められている)。晩年24年間の克明な日記から，大田南畝，頼春水など諸方の名士の多くが来訪する知識人のサロンの主宰者のような立場が分かるる。

中村真一郎「木村兼葭堂のサロン」，安村敏信「江戸の絵師」，「没年日本史人物事典」，平凡社百科事典，「なにわ人物譜」。深谷克己・須田努(編)「近世人の事典」で追補，